

## 中高一貫私立学校における現代英語教育の意識調査 研究：学生の得意苦手意識を中心として

著者	坂本 育生
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	26
ページ	217-224
発行年	2017-03-30
別言語のタイトル	A study of consciousness of current English education at a private junior and senior high school: Focusing on good or poor consciousness of the students
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00029646">http://hdl.handle.net/10232/00029646</a>

# 中高一貫私立学校における現代英語教育の意識調査研究

— 学生の得意苦手意識を中心として —

坂本育生 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

## A study of consciousness of current English education at a private junior and senior high school — Focusing on good or poor consciousness of the students —

SAKAMOTO Ikuo

キーワード：中高一貫校、英語教育、アンケート調査、得意苦手意識

### (I) はじめに

本稿は、私立中高一貫校における現代英語教育に対しての学生の得意・苦手の意識調査研究である。従来の先行研究においては、一般に中学2年次と高校入学後の時期において、英語を苦手と感じ始める学生が多いとされてきた。しかしながら、中高一貫校のように6年間に渡って一定のカリキュラムで過ごす学生の意識調査研究は、一般に公立学校への進学を強く希望する九州南部地方においては、あまり実施されていなかったように思われる。そこで今回は、宮崎市にあるミッション系の私立中高一貫校の御協力を得て、2015年暮れ～2016年当初にかけて英語教育に対する中高生の意識調査を実施した。その結果、通常高校入試を経験する必要がない中高一貫校の場合においても、一般の公立学校生と同様に、英語に対しての得意苦手意識が強い傾向が判明した。また4技能においては、読むことに対してはあまり抵抗感がないが、書くこと、話すこと、聞くことの中で、特に書くことに対しての苦手意識が高いことが明らかになった。つまりかねてより指摘されていた、英語学習につまずく時期、得意、不得意に関しての意識が、中高一貫校でも存在している実態を、今回の調査データによって紹介する。

### (II) 現代英語教育の現状と本調査の背景

戦後の日本の英語教育は、時代を経るごとに変革が起り、従来の方法は別の方法に置き換わっていく傾向が強かった。特に20世紀から21世紀に入ると、2000年前後の文科省の学習指導要領の改訂時期を分岐点として、従来頻りに実施されてきた教科書の文法訳読を中心として、問題を解いて英語力を磨くという方針は、21世紀の国際社会において伝達能力を求められる実情と合わないと考えられてきた。代わって多くの教育機関において、学習指導要領に沿った「実践的コミュニケーション能力を向上させる英語教育」の導入が顕著となっている。(注1) さらに2016年夏に、次の学習指導要領が導入される予定の2020年度より、小学校において英語教育が高学年から正式科目として導入される見通しであると発表された。また実業界においても、日産、ユニクロ、楽天などのように会社内の公用語を英語にする企業も増えてきた。このような状況において、英語資格試験も以前にもまして人気を博しており、英検、TOEFL、TOEIC等はここ数年後に始まる大学入試改革で、大学入試センター試験の英語の代替テストとして採用される可能性が極めて高い。(注2) この流れは当然中学校、高等学校にもつな

がり英語に対する意識にも大きな影響を与えることとなり、中学校、高等学校、大学での英語教育のさらなる改善が求められている。

過去の先行研究においては、英語を苦手とする学生の多くは、そのつまずきは英語学習の基礎を終えたころに始まる傾向にあると言われている。例えば、根岸他(2014)の調査によると、英語学習のつまずきは主に中学2年生の時期と高校1年前期に多いと報告されている。(注3)英語を苦手と感じ始める主な理由としては、中学では1年次に単語、基本的な文法を学んだ後、単文、長文読解などの応用分野に入っていく、その後2年次当初において、授業についていけない学生が多く出てくるように思われる。さらに高校入学後に英語学習に苦しむ学生が多いが、多くの場合、中学時代に学ぶ文法事項などの基礎力が欠如している傾向が強い。実際に中学校での英語習得の指標とされる英語検定3級合格の実力を有する中学卒業生の割合は、都道府県により異なるが、全体的には50%を下回っていると考えられている。

それと同時に、最近の18歳人口の減少に伴い、大学に入学してくる学生の学歴背景は様々である。高校入試を経た後に、さらに大学への一般入試を受験する学生が多くみられる一方、推薦入試、AO入試で合格する学生も多く見られる。著者は勤務する鹿兒島大学において、30年以上の長期間英語教育を行ってきたが、最近特に英語力に不安を抱えている学生の割合が多いように思われる。例えば坂本(2015)が行った本学の理系学生へのアンケート調査では、医学部や歯学部の学生は受験への意識が高く、高度な学力を入試で求められ、英検2級以上の資格習得者も半数を越え、英語力に対してはほとんど不安を感じていなかった。対照的に、農学部、工学部、理学部、水産学部では、英語の基礎に不安を抱える学生が多数見られた。このような現状においては、大学に入学してくる学生は、基本的に中高で6年間もしくはそれ以上の英語学習を行ってきたが、大学においても基礎、特に文法、語彙、長文読解を中心とした補習を行う必要があると思われた。

鹿兒島大学は9つの学部を有する総合大学であり、多種多様な経歴をもつ学生が入学してくるため、様々な状況に応じた英語教育を提供していかなければならない。そのための研究として、現在までにいくつかのデータ収集を行ってきたが、今回はさらにその範囲を広げて、中高一貫校において英語学習傾向の調査を行い、その結果を検証し、今後の中・高・大の教育連携の強化を実現したいと考えた次第である。(注4)

### (III) 調査の概要

本調査は、宮崎県宮崎市にあるミッション系私立学校でアンケート調査を行った。当校は中高一貫教育を行っており、学生の進路は主に大学であり、多数の合格者を輩出している宮崎での名門の進学校である。今回は中等部、高等部に所属する両方の学生に対し、英語学習に対する同様のアンケート調査を行った。調査年次は2015年度2学期で、中学3年生、142名、高校3年生131名に対し8つの質問項目について回答してもらうように依頼した。今回はその中から本研究に関係する5つの質問項目に関して検討した。各質問には4つから6つの選択肢があり、英語に対する得意、苦手の意識調査と4技能(書くこと、読むこと、話すこと、聞くこと)に関する調査で構成されている。(注5)

### (IV) 調査結果と検証

#### (IV)-1 中学生への質問および回答

中学生142名より回答を得たが、それぞれの問いの選択肢に対し、その割合をパーセンテージ(%)で示した。なお基準は4段階とし、中途半端な回答となる「どちらでもない」の回答は、意図的に避けた。

質問(1)：あなたは英語が得意ですか、それとも苦手だと思いますか？

1. とても苦手 2. やや苦手 3. やや得意 4. とても得意

問1				
1	2	3	4	無回答
20	36	36	6	2

質問(1)では英語を得意と答えた学生よりも、苦手を答えた学生の方が多かった。(苦手56%、得意：42%) 一般的には中学段階では英語を苦手と考えている学生がやや多い傾向があり、サンプルが限られた1校での調査であるが、今回もその傾向が強いことが分かった。中間・期末等の定期テスト(achievement test)の点数はよいかもしれないが、はたして実力(proficiency)が習得できているかどうか不安を感じているのかもしれない。大学でも英語基礎が十分でないというアンケート結果もでているので、英語初期のこの段階でのつまずきも一因と思われる。

質問(2)：(1)の質問で「やや苦手」「とても苦手」を選んだ人にお聞きします。いつ頃から英語を苦手と感じるようになりましたか。あてはまるものに1つ○をつけて下さい。

1. 中学1年の前半 2. 中学1年の後半 3. 中学2年の前半 4. 中学2年の後半  
5. 中学3年の前半 6. 中学3年の後半

問2						
1	2	3	4	5	6	無回答
17	22	26	27	6	1	1

質問(2)では興味深い回答が得られた。ベネッセ(2014)の報告では「中学2年の段階が英語を苦手と感じる時期ではないか」と想定しているが、本調査でも選択肢3、4の中学2年の時期に多くの学生が苦手と感じ始めているようである。また一般に昔から、中学2年と高校2年が所謂「中だるみ」の時期であるので、特に大切であると言われているが、まさにその指摘が当てはまるようである。21世紀の教育においても「戒め」としたいものである。

質問(3)：あなたがもっとも英語学習のやる気が高かった時期はいつですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 中学1年の前半 2. 中学1年の後半 3. 中学2年の前半 4. 中学2年の後半  
5. 中学3年の前半 6. 中学3年の後半

問3						
1	2	3	4	5	6	無回答
32	10	14	13	18	12	1

質問（3）のやる気のある時期への質問では学び始めの1年前期が最も意欲の高い時期と答えている。やはり入学当初において、新しい科目の習得に対する意欲と、学習の初歩なので学びやすいという状況もあると思われる。

質問（4）：英語の授業で得意な活動は何ですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 読むこと      2. 書くこと      3. 話すこと      4. 聞くこと

質問（5）：英語の授業で不得意な活動は何ですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 読むこと      2. 書くこと      3. 話すこと      4. 聞くこと

問4				
1	2	3	4	無回答
41	27	11	19	2

問5				
1	2	3	4	無回答
4	44	24	26	2

質問（4）では、読むことと書くことに対する意識の高さが顕著である。また聞くことに対しても意識が高いのは、中学校でのカリキュラム上、この2つの活動が多いためかもしれない。一方、質問（5）のように、逆に書くことが苦手と答える学生が多い事実もある。実際に4技能の中で最も習得が難しいものは、一般に書くことであると言われているので、その現状が既に中学段階で出ている可能性があり、今後もさらなる調査を行う必要がある。

#### (IV)-2 高校生への質問および回答

中学生と同様に、高校2年生131名を対象にしてもアンケート調査を行った。先行研究においては、高校生になると学ぶ英語も高度になり、苦手意識を持つ学生も増えてくる傾向が強かった。高校1年生の時期は今まで学んできた環境から劇的に変わることが多く、教科書、参考書も高度になってくることも大きな一因であろう。ベネッセ(2014)ではこの時期に英語が苦手であるという学生が多いことが報告されている。

中高一貫校ではその影響に関しては比較的弱いであろうと予想していたが、本アンケート調査では、苦手と感じる学生の割合が中学生よりもかなり多くなっていた。当初は中高一貫校では高校受験を経験する必要がなく、同じようなカリキュラムで授業を受けることができるので、学習環境の負担は少ないと考えていたが、実際は英語に不安を感じる学生が増えていることが判明したのは、この調査研究の大きな成果であった。

質問（1）：あなたは英語が得意ですか、それとも苦手といますか？

1. とても苦手      2. やや苦手      3. やや得意      4. とても得意

問1				
1	2	3	4	無回答
30.5	41.2	21.4	5.1	1.5

先に述べたように、当初は中高一貫校では同じカリキュラムで授業を受けられ、高校受験を経験しなくてもよいという利点があるため、英語力に不安を感じる学生は一般の学生に比べ少ないと考えられていたが、実際には中学生の時期（苦手と感じる割合約56%）から、高校時点では実に約72%が苦手と感じるという結果となった。多くの学生が大学進学を希望する中高一貫校においても、実に70%を越える高校生が英語を苦手科目と考えているという事実は、英語教育に関わるものとして、真剣に受け止めなければならないであろう。この調査データは、今後の大きな英語教育の改善事項になると思われる。

質問（2）：（1）の質問で「やや苦手」「とても苦手」を選んだ人にお聞きします。いつ頃から英語を苦手と感じるようになりましたか。あてはまるものに1つ○をつけて下さい。

1. 中学1年の前半    2. 中学1年の後半    3. 中学2年の前半    4. 中学2年の後半  
5. 中学3年の前半    6. 高校入学以降

問2					
1	2	3	4	5	6
7.4	6.9	16	11.7	17	37.2

学生が英語を苦手と感じる始める時期は、高校の時が最も高く、続いて中学2年の時期が高くなった。やはり高校での高度な学習内容が影響していると思われるが、今後も様々な学校でデータを取る必要がある。このデータに関しても、先行研究の指摘とかなり一致した。

質問（3）：あなたがもっとも英語学習のやる気が高かった時期はいつですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 中学1年の前半    2. 中学1年の後半    3. 中学2年の前半    4. 中学2年の後半  
5. 中学3年の前半    6. 高校入学以降

問3						
1	2	3	4	5	6	無回答
35.9	9.9	8.4	3.1	13	26.7	3.1

中学生の回答と同様、中学1年のときが最もやる気が高かった。興味深い点は、高校時期も苦手と感じる学生は多いが、その一方において、やる気は高いという回答が得られたことである。中学1年の時期は新しい科目として英語を学び始め、モチベーションが強かったが、中高一貫校においても高校という新しい環境が、英語学習の動機づけのための良い時期と成り得ると言えるかもしれない。

質問（4）：英語の授業で得意な活動は何ですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 読むこと      2. 書くこと      3. 話すこと      4. 聞くこと

質問 (5) : 英語の授業で不得意な活動は何ですか。あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 読むこと      2. 書くこと      3. 話すこと      4. 聞くこと

問4				
1	2	3	4	無回答
30.5	33.6	20.6	13	2.3
問5				
1	2	3	4	無回答
4.6	34.4	19.1	40.5	1.5

ここではある顕著な結果が得られた。つまり、一般に英語4技能のうちで、最も難しいものは書くことと言われているが、本調査でも書くことが苦手であると答えた学生が多かった。また聞くことに対する苦手意識をもつ学生も多かった。この傾向は中等部でも類似した結果が出た。つまり、調査校の学生は一般的に読むことにはあまり問題を感じてはいないが、その他の3技能に関しては、どこか不安を感じているようである。一方、書くことに関しては、得意であると感じる学生も多く、同時に苦手意識を感じる学生も多いという、相反する結果となった。これは筆者の推測にすぎないが、「英語を書く技能」に関しては、得意と感じる学生と、苦手と感じる学生の二極化の現象が見られるようである。その点の意識調査は、今後のさらなる研究課題としたい。

#### (V) 考察と今後の課題

冒頭で述べたように、本研究は中高一貫校における英語学習、英語教育に対する中高生の意識の調査である。当初は、中高一貫校は学習環境が中学、高校でさほど変わらず、高校受験を経験することなく大学受験などを迎えるため、英語に対する苦手意識は一般的な進路を辿る学生に比べ低い予想されていた。しかしながら、実際は英語に苦勞しているという回答がかなり多く、特に中学時期より高校生時期のほうが、英語が苦手と答える割合が著しく増加するという結果となり、英語教育の難しさが改めて浮き彫りになった。

筆者の勤務する「国立大学法人鹿児島大学」においても、英語を苦手とする学生は多く、その問題は中・高・大の全ての英語学習期間に存在しているようである。その改善策は今後の大きな研究テーマであるが、坂本(2015)の調査でも、基礎の学習を望む学生の要望が強かったのは事実である。参考データとしては、TOEICを運営する「国際コミュニケーションズ」のニューズレターによると、日本の大学生のTOEIC平均点は、ここ10年余りほとんど向上しておらず、990点満点中450点~460点あまりしかない。これは英検に換算すれば英検2級に合格するか否かのラインであり、大学生の基礎力充実のために高等学校の補習教育を実施している大学も多い。

さらに21世紀の国際社会においては、国際語である英語による情報伝達が必要とされているのにも関わらず、多くの日本人学生が、読むこと以外の3技能に関して不安を抱き、意識が向いていないことも気になる事実である。現状では、多くの中高生たちは、大学受験を特に強く意識しなければならない環境にあり、大学入試で出題される英文読解が主体にならざるをえないのかもしれない。英語学習のつまずきが重要な問題となるが、より詳しい調査を行わなければ解決しないであろう。ただ、現行の中学校、高校のカリキュラムであれば、次々と新しい文法項目、単語、文などを学習する必要があり、少しでも乗り遅ればついていけないのもうなずける。さらに学習する



のは英語だけではなく、国語、数学、理科、社会など、学ぶ教科は多いので十分な復習の時間も取れていないものと思われる。この件に関しては今後の調査対象であり、中・高・大でのより大規模なアンケート調査を実施したいと考えている。(注6)

最後に、今後の英語教育の注目すべき展望としては、2020年度から小学校でも英語教育が正課となる見通しで、小中高で一連の英語教育がさらに展開されていくこととなる。そうなれば今までの中学から高等学校という英語教育の在り方も見直され、より連携した教育が望まれることになるとと思われる。ただし、小学校英語教育には指導教員の確保、施設の整備、教科書の作成等の様々な問題があり、今後の課題となっている。今回の調査、研究は私立の中高一貫校を対象として行ったが、全国には多数の中高一貫校がある。今後の研究ではさらに調査を行う中学・高校を増やし、また学術的な統計処理も実施し、私立公立における様々な中高一貫校に対しての調査を行い、21世紀の国際化時代にふさわしい英語教育を考案したいものである。

注)

- 1) 詳細は、文部科学省(1998)「中学校学習指導要領」等を参照。
- 2) 今までの入試は主にReadingを重視していた傾向が強く、大学入試センター試験での配点は、一般に、Readingが200点である一方、Listeningの配点は、一般に40点～50点にすぎなかった。今後は4技能を総合的に評価できる問題の内容への変化が求められ、その一環として民間英語資格試験の入試への導入が顕著になっている。例えばTOEICにおいては、ListeningセクションとReadingセクションの配点比率はともに50%ずつである。
- 3) 詳細は、本間(2003)、根岸他(2014)、坂本(2015)等の参考文献を参照。
- 4) 学部毎の学生に英語学習に対する意識の違いについては、坂本(2011),(2012),(2013),(2015)等を参照。
- 5) この紙面をお借りして、調査の御協力いただいた関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。
- 6) 多くの教師の間では「7-5-3の原則」という数値が有名である。それは、小学校で授業について行く生徒(学生)の割合が7割、中学校では5割、高校では3割という意味である。

#### 参考文献

- 本間義文(2003)「近畿大学工学部学生の英語能力の現状—TOEICスコアおよび語法理解の分析による適正目標設定の試み—」 近畿大学工学部紀要
- 文部科学省(1998)『中学校学習指導要領』東京 財務省印刷局
- 文部科学省(2009)『中学校学習指導要領』東京 東山書房
- 根岸雅史、酒井英樹他(2014)「中高生の英語学習に関する実態調査2014」ベネッセ教育総合研究所
- 坂本育生(2011)「水産学部専門英語に関する基礎研究」 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA) No.35、pp.37-48.
- 坂本育生(2012)「ESP教育の研究と開発 — 海事英語を出発点として」 鹿児島大学教育学部実践研究紀要、No.22 pp.83-90.



坂本育生(2013)「ESP教育の研究と開発 —海事英語を出発点として—」 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA)  
pp.55-63.

坂本育生(2015)「鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究 (1)」 鹿児島大学教育学部研究紀要 第6  
7巻 pp.71-79.